



六花  
2

俳句雑誌りつか  
2018 (平成30年)  
cover design ichigo

山田六甲

道

弟は伊豫で病みをり焼みかん  
父の血をお前も継ぐか寒を病み  
注連飾一軒もなく町暮るる  
大寒の木に化けてゐる風の声  
手風呂など要らぬと内子和紙を漉く  
書初の墨磨るに猫邪戯れて来し  
寒しじみ搔きたる濁走りけり  
春水の心は石に留まらず  
薄氷を汀に踏めば軋みけり  
大寒を耐へゐる石に歩み寄る  
鳶凍え落ちて来さうな曇なり  
手袋を忘れて石につまづきぬ  
薄氷を踏み抜く鴨の遊びかな  
竹垣を結直しあり春の雪  
石の乗る朝の氷の乾きけり

出し惜しみなどしてをらず白息も  
鼻マスク女を捨てしにはあらず  
薄氷を踏み割る遊び覚えし鴨  
薄氷の中に木の葉のこごりかな  
金縷<sup>ろうばい</sup>梅<sup>い</sup>の寄せ手惑はす大手門  
藤の豆忍<sup>しのび</sup>者の色に凍ててをり  
紫ぼうし被りて松の冬芽かな  
白鳥に追はるる鴨の美しき  
鯉の群指さしあへる息白し  
さざなみの薄氷に来て縮こまる  
凍てついてブローチほどのよもぎかな  
冬かはせみ色幻のごとくなり  
薄氷の大手門まで戻りけり  
寒波襲来子午線に神風もなく

落鮎や錦帯橋に小糠雨  
海わたる蝶のきてをり藤袴  
椿の実城のかたへに登り窯  
初しぐれ窯より高き薪の嵩  
蔓引かばあらぬ通草のゆれにけり  
水影の芙蓉の紅の濃かりけり  
芙蓉の実人呼ぶ音をたてにけり  
やや早きひとりの夕げ秋の声  
夫逝きし日ごと厨の水澄めり  
新酒酌む子にまかせたきことあまた

高華抄

葉 騷

佐津のぼる

色鳥来葉騷の梢に見え隠れ  
帰る日の燕の並ぶ送電線  
雨のまだ乾かぬ空へ燕去る  
空へ逃げすぐ群なせる稲雀  
青空に鳴る桐の実を仰ぎけり  
芋の葉のほろりと露をこぼしけり  
山の端もくまなく澄める望の空  
名月の影踏むあそび塾帰り  
音たてず椅子ずらしたる月の客  
ジーパンのごはごはが好き草風

# 工場の朝の体操霧の中

大内 幸子

工場の朝の体操霧の中

陽の射して行く先々に放屁虫

車窓よりかりがねの列追ひ越せり

柿日和転ばぬやうに小買物

生かされてゐるのが不思議残り柿

こうじようのあさのたいそうきりのなか おおうちささち

秋が深まると川沿いに霧がかかる。句の工場も、山間部、しかも川沿いの工場で勤め人が操業前の準備体操をはじめた。霧ともやで視界もさだかではなく、社員もまだまだ眠いから、気分が霧のようにはつきしてない。眠い目を擦りながら体操をしている光景を幸子の目がおぼろげながら捉えた。工場員立ちは体操が終わる頃意識がはつきりとして、「さあ今日も一日無事で頑張ろう！」と声を上げて、職場について行くのである。幸子は長年六花で頑張ってきたこの度夢風撰巻頭を勝ち取った。

# 歯ごたへの良き沢庵を貰ひけり

延川 笙子

歯に沁みる冷たさの良き熟柿かな

獅子舞の金歯鳴りゐる秋祭

白き歯のこぼるる笑顔菊花展

秋風や歯に着せてやる衣なく

歯ごたへの良き沢庵を貰ひけり

はごたえのよきたくあんをもらひけり のぶかわしようこ

沢庵のよろしさは、歯ごたえ、味の決め手は干し具合と重石。山梔子の実で着色など漬け方は色々あるが、糠、塩、柿の皮、昆布など。シンプルな食べ物。日本の主食である米に相応しい保存食だから味にごまかしようがない。食事中に他人が音を立てるのは不快であるが、沢庵だけは自身は勿論、他人がポリポリとおとを立てても心地よい。掲句は簡潔で心地よい響き。基本季語は「沢庵漬」で大根漬ける・新沢庵・新漬大根・早漬け沢庵などが傍題。沢庵だけでも基本季語としている歳時記もある。

雪卿集 せつけいしゅう

時雨

藤生不二男

こたつ

出口

誠

日の差して傘たたみたる時雨かな

それぞれの不安持ち寄るこたつかな

楳の火に楳を足しゐる女将かな

冬うららクレーソンの赤が動きをり

楳の炉のくすぶりゐたる時雨かな

冬の雨枝を濡らして光りをり

たてがみの光りはじめし初時雨

冬もみぢ緑の部分残りけり

雲間より日の差しきたる霰かな

虫喰ひの穴ぼこだらけ冬もみぢ

組まれたる楳に移りし焔かな

柿落葉笑ふ魚に見えにけり

積まれたる薪のかたへの落葉焚

くつ下を浸水させて冬の雨

縁側のしぐれてきたる遠田かな

空蟬に驚く子ゐて冬の庭



暮早し

永田万年青

黄落

升田ヤス子

齒の治療終へし佳き日や天高し

黄落や鹿の齒形の残る木々

起き上がり痛みの走る冬に入る

紅葉かつ散る来年の手帳かな

雪吊りの支柱の尖へ庭師かな

鳩ふたつ見しはまぼろし隠れ沼

手の届くところに柿のたわわかな

菱の実の岸をよるべの隠れ沼

路地裏の石に躓く秋の暮

大綿のうすずみに空漂へる

川の面の灯りそめたる暮早し

灯や親しこけし笑み出す面相筆

夕時雨傘を持つ人持たぬ人

町石に紅葉の傘や高野道

冬に入る心ぬくむるカラオケぞ

しぐるるや羽二重翳る乳房絵馬

嵯峨菊

志方 章子

かまきりと戯れをりぬ庭仕事

秋灯の漏れゐるドアを通り過ぐ

鳶もみぢ馴染の本屋閉ぢにけり

秋祭の話ばかりや見舞客

空を切る手やとんぼうの鷺掴み

白々と団栗落ちてゐたりけり

嵯峨菊にぱつと明るき未来かな

一声に悩まされをり秋の蠅



# 雪樹集



朝の父

溝渕 弘志

小さくも重き毛蟹を選びけり  
新蕎麦を箸割つて待つ夫婦かな  
沢庵の快音聞ゆ朝の父  
どの道を行くのも同じ冬の風  
丘に立つ全て休眠冬至かな  
大晦日幸を綴つて筆を擱く

紅葉

延川五十昭

筆洗ふ溪のむかうの櫛紅葉  
心まで染められてゐる初日出  
襟立てて絵筆もつ手に猫じやれる  
弁慶の掌ほどの蔦紅葉  
秋祭稚子の花冠揺れてをり  
万作の黄葉に書いたラブレター

秋の海

住田千代子

逆光の雫散らばせ鯉飛び  
澄む水に浮かべてゐたる神籤かな  
秋霖や介護に暮れる友をふと  
蘊蓄に離れられなく菊の前  
秋の海ちりめんぢやこのほどの油  
帯解いて襠褌換へやる七五三

銀杏散る

田尻 勝子

銀杏散る失せし黄金のネックレス

桜紅葉昨夜の口唇数多落つ

秋の末古代陶器の破片かな

ドアを細めに開けて頂く山の柿

乳母車案内している落葉かな

寒月や蹠跟めいて打つメールかな

初紅葉

廣畑 育子

点々と野山色づく朝ぞかし

登高の人連なれる脊山かな

豆柿や石段登り来る人よ

算額の色褪せをらず初紅葉

竜山の芒の先の小島かな

もみづれる石切山に入り日かな

秋日

赤松有馬守破天龍正義

蹲の小鳥見ながら歯を磨く

歯に衣を着せて秋日の祝ひ事

粒選りの柿を頂く誕生日

身に沁むや落書の有る告知板

歯に力込めて胡桃を割つてをり

無花果を皮付きのまま食しをり

細峠

平居 滯子

細峠腰の落ちつく鴟日和

爪先で探る山道落葉積む

朴落葉御札受くごと重ね持つ

熟れ柿の落つるにまかす一周忌

わが子にはわが子の嘆き日短

冬茜仏壇にまで届きけり

秋の夜

谷口 一献

熱爛は齒に沁みてから咽に沁む

秋の淋しさに一升瓶を抱く

眠れぬ夜は好きなだけ吞め神の留守

黄落に鴟尾放光を仰ぎけり

银杏散る影ふわふわと池を這ふ

イシグロと同衾をする夜長かな



# 蛩雪譚

三十年一月号から

(抜粋)

善野 行

村歌舞伎端正な娘の富樫かな

能の演目『安宅』から歌舞伎や芝居に採り入れられた勸進帳の場面で、富樫役の女の子が義経、弁慶の主従を糺す。「はて、その勸進帳を遊ばせ候らはせ給へ、これにて聴聞つかまつらーん」と弁慶に問いただす少女の見事な演技と容姿に感銘しているのも、作者は女子生徒に置き換えて教師の目になっているのだろう。

増田 裕子

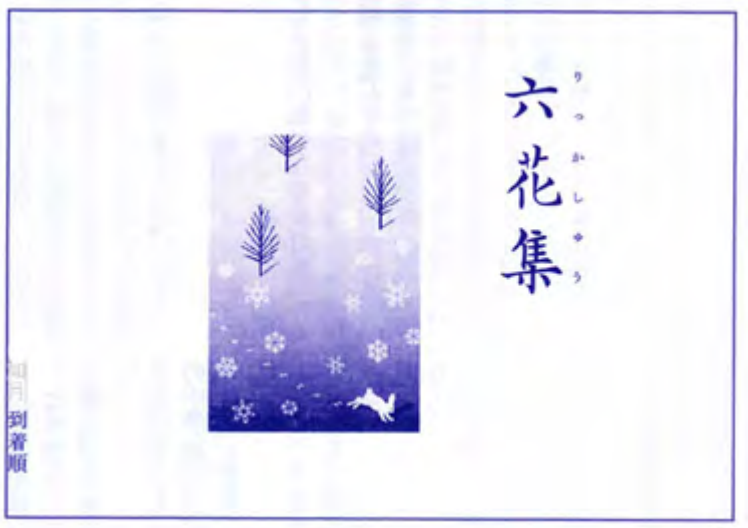
歯の生えし赤子のしやぶる熟柿かな

どのような音がするのだろうと想像が広がる。やつと歯が生えてきた赤ちゃんの熟柿を食べる音さえもみずみずしい音がするのだろう。返つてわれわれお爺ちゃんお婆ちゃんの歯抜けや入れ歯の音とは明らかに違うだろう。未来を呼び込む希望の音にちがいない。最近病に冒されていると聴いた。一日も健康を取り戻して特別作品に取り組んで欲しいと思う。

篠原 敬信

今日も晴れ歯磨きあとの秋の朝

秋の朝の爽やかさを歯磨きの爽やかさで相乗効果をもたらした。また、今日も晴れとは気持ちも晴れやかな一日の始まりという晴れ晴れとした気持があらわれて読者にも伝わってくる。ところで敬信さんは一人で釣りに行くという。出来ることなら一人でなく二人以上で安全な釣りをして欲しい。



小林はじめ

季のうつり捲りめくるや返り花  
狂い花現世覗きに出でしかな  
唐突に木枯らしみまふけふの午後  
凧とともに帰るか侘び住まひ  
透き間風部屋の灯明揺らすかな

大内 幸子

工場の朝の体操霧の中  
陽の射して行く先々に放屍虫  
車窓よりかりがねの列追ひ越せり  
柿日和転ばぬやうに小買物  
生かされてゐるのが不思議残り柿